「水の女」，あるいは姨棄てについて

梅　山　秀　幸

(一)

『讃岐典侍日記』は平安時代，堀河，鳥羽両天皇の側近く，典侍として仕えた女性の手になっている。死の床に横たわる堀河天皇の有様，日々に衰え，時々刻々に推移していく病勢をことこまかに描いている点，扱われているのが最高権力者と平凡な市井の一官吏との違いはあるが，トルストイの『イワン・イリッチの死』をほうふつとさせるものがある。一個の人間の死を凝視した文学として，日本文学の中で他に類を見ない作品だと思われるが，現代のわれわれから見て奇妙に思われるのは筆者の讃岐典侍と天皇との間に親しく通い合う情愛のよって生まれて来るゆえんである。それは現代ならば「夫婦愛」と呼ぶのがいちばん適切に思える。しかし，筆者はけっして天皇の妻だったわけではない。「典侍（ないしのすけ）」という律令制下の官職にあって，女性官僚として天皇に奉仕しているのである。中宮，女御といった天皇の「妻」たちは他にいる。しかし，正妻といってよい中宮篤子は死に行こうとする堀河天皇のもとにほんの二度顔を見せただけで，死を見取るということはしなかった。

ものなど申させたまはんとぞおぼしめすらん，と思へば，御あとのかたにすべりおりぬ。ちがひて，なげしのうへに，宮のぼらせたまひ，しばしばかり，何ごとにか，申させたまふ。殿の御声にて，「ひさしくこそなりぬれ。御かゆなど，はや参らせんや」とおほせらるるに，宮，聞かせたまひて，「今は，さは，帰りなん。あすの夜も」とおほせられて，帰らせたまひぬ。

（口語訳――中宮は天皇に何か申し上げようとお思いなのだろう，と思うので，わたしは後ろの方にひきさがった。入れかわりに，長押の上に，中宮がお上がりになり，しばらくの間，何ごとか，お話になっている。関白殿の御声で，「だいぶ時間がたった。おかゆなどをはやくさしあげろ」と仰っしゃると，中宮はそれをお聞きになって，「もう，それでは，帰ることにしましょう。あすの夜も参ります」と仰っしゃって，お帰りになった。）

相伴ぐらいすればいいのに，匙を使って食べさせてもいいのにと思うが，そんなことはせず，さっさと帰ってしまう。どうやら「妻」とはそういうものらしいのである。日常の生活においても身の回りの世話などをするわけではない。その意味で，妻以上に妻らしく身の回りの世話をし，しかし，妻とは呼べない女性たちがいる。

現在この間の事情がわかりにくくなっているのは，日本に華族制度というものがなくなってすでに半世紀も経過していることにもよるのかもしれない。その点で，島本久恵の小説『貴族』は，京言葉を駆使したその文体の生新さもさることながら，戦前の華族社会のありようをあますところなく描いていて，教えられるところが極めて多い。そこでわかるのは，下世話な言い方をするが，お手付きの女中などすこしも珍しいものではなかったということである。権門勢家から迎えた妻には気兼ねがあって，親しい気持ちなど抱きようがないかもしれない。それにくらべると，身の回りの世話をあれこれとしてくれる女性に極く親密な感情を抱くようになるのは自然の成り行きであろう。しかし，その女性が妻に昇格することはない。子供が生まれたとしても，里に下がらされ，やがて闇に葬られてしまうことになるだろう……正妻はそういっ

た女性たちに目くじらを立てることもない。目くじらを立てれば，その女性たちの存在を認めることになるし，また自己の沽券にもかかわるから。

「典侍」もそういった女性といってよいと思うが，制度的には後宮十二司のうちの内侍司の次官をいう。後宮職員令は内侍司について次のように規定する。

内侍司

尚侍二人。掌らむこと，常侍，奏請，宣伝に供奉せむこと，女孺を検校せむこと。兼ねて内外の命婦の朝参，及び禁内の礼式知らむ事。典侍四人。掌らむこと尚侍に同じ。唯し奏請，宣伝すること得ず。若し尚侍無くは，奏請，宣伝すること得む。掌侍四人。掌むこと典侍に同じ。唯し奏請，宣伝すること得ず。女孺一百人。

奏上して勅を請い，その勅を宣し伝える，奏請および宣伝はこの部局の長である尚侍のみの仕事であるが，後宮の女孺たち，つまり女性職員すべての監督，内命婦（本人が五位以上の女性），外命婦（五位以上の官人の妻）の朝礼および宮廷内での儀式・礼儀を執行する。それが内侍司の職分である。尚侍はこの部局の長だが，ただし，尚侍が東宮妃のような存在になって実務から離れるとともに，その職責は典侍に移るようになる。「女は，内侍のすけ。内侍」と『枕草子』はいってのける。掌侍を内侍というようになっている。いかに内侍司の女性たちの羽振りが下級職員といえ，よかったかを示していよう。「内侍宣」という言葉があって，天皇の勅命はそのまま人びとに伝わったわけではない。「奏請・宣伝」が内侍司の女性たちの仕事であったことの意味は大きい。それは政治的に薬子の変（810）のきっかけにもなったと思われるのだが，たとえば，日本語の敬語の形成にも反映している。つまり，「す」「さす」という使役の助動詞は「たまふ」「おはします」といった敬語と複合し，「せたまふ」「させおはします」となって，最高の尊敬を表すことになる。最も高貴な方は自ら手を下すことなく，誰かにおさせになるという表現をとるわけである。また逆に，「たてまつる」「きこゆ」という謙譲語と複合して「たてまつらす」「きこえさす」の形をとってさらに強い謙譲を現す。つまり，相手に対して直接に動作を行うのでなく，間に人を介して，その人に行わせるという表現をとって，相手への深いへり下りを表すわけである。天皇が何かをしようとする場合，天皇に何かをしようとする場合，いつもそこには人を介さなくてはならない。「常侍」の内侍司の女性たちがそれにあたるといってよいであろう。

ちなみに，唐で内侍省といい，朝鮮で内侍府といえば，宦官の勤める役所だったことを銘記して置くべきであろう。韓国語で내시（内侍）といえば宦官，去勢された男の意味であり，申相玉監督の『内侍』は朝鮮時代の後宮の宦官の生態を描いた名画である。日本は中国の文物を受け入れ，それを変容することで，自国の文化を発展させていったが，宦官の制度だけは頑としてはねつけた。そのことは比較文化の立場，あるいは比較民族学の立場からは，面白い研究課題となるであろう。中国，朝鮮において内侍は宦官というそれぞれの社会の極めて特徴的な部分，あえていえばその社会の業のような部分によって担われている。日本における内侍も，これからそれを明らかにしていくつもりなのだが，やはり日本の社会制度に固有な部分によって担われていると思われるのである。

(二)

堀河天皇と讃岐典侍との交流を示すいくつかの場面を引いてみよう。律令の条文を読むより，典侍という立場を如実に表してくれるように思われる。

たれもいもねずまもりまゐらせたれば，御けしきいと苦しげにて，御足をうちかけて，おほせらるるやう，「われば かりの人のけふあす死なんとするを，かく目も見たてぬやうあらんや。いかゞ見る」と問はせたまふ。聞くここち，ただむせかへりて，御いらへもせられず。

（口語訳――誰も一睡もせず天皇を御看病申しあげていると，たいそうお苦しそうで，

わたしにおみ足をうちかけて，「天皇であるこのわたしが今日明日にも死のうとしているのを，こう気付かずにいてもよいものであろうか。いったいどう思っているのだ」とお尋ねになる。それを聞くわたしの気持ちといったら，ただ涙にむせかえるばかりで，ご返事もできない。）

天皇としての威厳はすでになく，死に直面して，周りの者にだだっ子のように振る舞う。天皇は筆者に足を打ちかける。そうした接触が生を終えようとする者にわずかでも安らぎを与えるのであろう。筆者はその場を去って休息することもできず，「乳母（めのと）などのやうにそひふしまゐらせて，泣く」のみであった。天皇が眠っていても，いつか眼ざめ，そのときみなが寝入っていては恐ろしくお思いになるであろう，そう思って筆者は一睡もせずに見守っている。そうして，ようやく夜が明ける。鐘の音が聞こえ，鳥が鳴き始める。

朝ぎよめのおとなど聞くに，明けはてぬと聞こゆれば，よし，例の，人たちおどろきあはれなば，かはりてすこしねいらん，と思ふに，御格子参り大殿油まかでなどすれば，やすまんと思ひて単衣をひきかづくを御覧じて，ひきのけさせたまへば，なほなねそと思はせたまふなめり，と思へば，起きあがりぬ。大臣殿の三位，「昼はおまへをばたばからん。やすませたまへ」とあれば，おりぬ。侍ちつけて，「われも，強くてこそ，あつかひまゐらせたまはめ」といふ。なかなか，かくいふからに，たへがたきここちぞする。

（口語訳――朝の掃除の音などがして，すっかり夜が明けたと思われるので，さあいつものように，お付きの人びとが眼をさましたなら，交代してすこし眠ろう，と思っていると，人びとが御格子を上げ，大殿油を下げなどしたので，お眼ざめになって，私が休もうと思って単衣をひきかぶるのを御覧になったらしく，天皇は単衣をひきのけなさる。やはりわたしに寝ないでほしいと思っていらっしゃるようだ，と思うので，起き上がった。大臣殿の三位が，「昼の間は，みかどに取りつくろっておきましょう。おやすみください」といったので，局に下がった。わたしを待ちつけていた者が，「ご自身も丈夫でいてこそ，十分にお世話申すことができましょう」という。かえって，こういわれると，悲しみにたえられない思いがする）

堀河天皇にとって讃岐典侍はかけがえのない女性である。彼女なしでは気嫌が悪く，彼女の手からでなければ食事もしない。死を目前にして，彼女にだけは誰よりもまずそばにいて欲しい。妻にそんなことは要求しない。『史記』に少し似通った箇所がある。

黥布が反した時，高祖ははなはだしく病んで，禁中に臥せり，人を遠ざけ，誰も入らせなかった。そうして十余日，樊噲が思い切って入って行った。

上獨リ一宦者ヲ枕ニシテ臥セリ。噲等上ヲ見テ流涕シテ曰ク，「始メ陛下臣等トトモニ豊沛ニ起チ，天下ヲ定ム，何ゾ其ノ壮ナルヤ。今天下已ニ定マル，又何ゾ憊シムヤ。且ニ陛下病ムコト甚シク，大臣震恐スルモ，臣等ト事ヲ計ラズ，獨リ一宦者ヲ顧ミテ絶エントスルカ。且ニ陛下ハ獨リ趙高ノ事ヲ見ザルカ」ト。高帝笑ヒテ起ツ。

高祖にとって，病んで心の頼りになるのはたった一人の宦官だった。天下を平定するのに数多くの功臣がいたはずだが，彼らではなく，まして女丈夫の呂后ではなく，美しい威夫人ではなかった。女性たちはむしろ悩みの種であって，心を休ませるどころの人たちではなかった。中国と日本で宦官と女房の違いはあれ，その最高権力者との距離，あるいは密着の仕方は等しいといってよい。内侍というのはそういう役どころ，孤独を余儀なくされる権力者の側にあって，家族よりも家族的な，男女の性別を問わず，妻よりも妻的な，もっとも〝身うち〟の人びとである。

(三)

内侍司は律令制度下の役所であるが，その実，日本の古い乳母の習俗をそこに吸収しているように思われる。『讃岐典侍日記』にも天皇の病態

が悪化して，看病の手を集めるところで，「御乳母たち，藤三位，ぬるみごこちわづらひて参らず，弁の三位は，東宮の母もおはしまさでおひたたせたまへば，心のままにさぶらはるべくもなきにあはせて，それも，このごろ，おこりごこちにわづらひて。ただ，あやしの人のわづらふだに，人のいとまいり，したしくあつかふ人多くほしきに，これはましてほし」（口語訳――御乳母たちとしては，藤三位は，熱病をわずらって参上せず，弁の三位は，皇太子が母もいらっしゃらずお育ちになっているので，思うように天皇にお仕えすることもできない上，この人も，このごろ熱病の発作に悩まされていて。ただ，大弐の三位とわたしとあわせて，三位だけがおそばにはべっている）とある。この文脈では，正確に誰が乳母なのかわからない。乳母といえば，これも律令によって規定があるはずなのだが，それはともかく，ここに上げた人びとが「乳母だつ人」であることについて異論はないであろう。乳母は母に代わって新生児に乳を与え，哺育する女性であるが，「チオモ」と呼ばず，「メノト」と呼ぶとき，極めて根源的な日本の社会制度，あるいは習俗がそこから喚起されることになる。「メノト」は，折口信夫の指摘を待つまでもなく，「妻（め）の弟（おと）」である。すると，どういうことになるか。夫にとって妻の妹，それが「メノト」であり，彼女が姉に代って新生児を哺育した。新生児にとって彼女は母の妹，つまり姨（ヲバ）である。姨がヲヒを育てる風習があったということなのである。実に簡単なことだと思うのだが，このようなことすら今まで正しく把握されていなかった。

少し言葉の整理が必要である。日本語の「ヲバ」は父方，母方の区別なく使う。そして無造作に「伯母」「叔母」という漢字を使う。しかし，この漢字の使い方は誤っている。中国語では，父方のヲバを姑といい，母方のヲバを姨という。父の兄弟を伯父，叔父といい，その妻たちが伯母，叔母なのである。

ちなみにヲヂも日本語では父方，母方の区別をしないけれど，中国では父方の伯父・叔父・仲父・季父（長幼によって呼び分ける），そして母方の舅とを区別する（図1参照）。

さらに，中国語の親族名彙を分析してみよう。「姪」という言葉について，『釈名』は，

姑，兄弟ノ女ヲ謂ヒテ姪ト為ス。姪ハ迭ナリ。共ニ行キテ夫ニ事フ。更迭進御ナリ。

としている。メヒはヲバといっしょに結婚するという，とんでもないことが書かれているのだが，これについては『春秋公羊伝』の次の一節を補えば，説明が可能となるであろう。

諸侯一国ニ娶ル。則チ二国往キテ之ニ媵ス。姪娣ヲ以テ従フ。姪トハ何ゾ。兄ノ子ナリ。娣トハ何ゾ。弟ナリ。

諸侯が一つの国と婚姻関係を結ぶときにはその国と同姓の他の二国とも婚姻関係を結ぶ。一つの国からは，年長の女性と，その妹（娣）と，さらに兄の子（姪）とがやって来る。三つの国から三人の女性がやって来て，一度に九人の女性と結婚するというわけである。

妻の姪については，子供の嫁として取って置けばよい。そうすると，母方交叉イトコ婚となって，合理的な体系ができ上がると思われるのだが，中国では父親が子供の配偶者を横取りする傾向がある。そうして，日本では逆に，子供が父親の配偶者であるべき娣，あるいは姨に手をのばす傾向がある（図2）。

図1

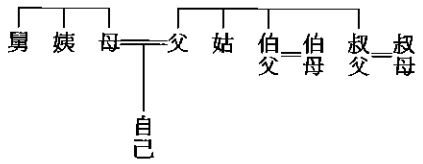
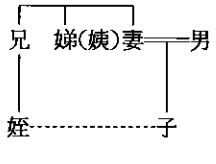


図2



(四)

結論を急ぎ過ぎたようである。まず，日本の古代において，母方交叉イトコ婚，つまり男性自己にとっての母の兄弟の娘との結婚が優先したことを押えて置こう。図示した結婚はすべてが男性自己にとって母方交叉イトコとの結婚である。このモデルで明らかなように，女性が贈与されるものと考えるとき，女性は常に左から右へと流れ，その流れは一定である（図3）。

母方交叉イトコ婚の優先は身分制度とともにある。結婚は身分の下の女性と身分の高い男性との間で行われる。つまり昇嫁婚が行われ，逆の降嫁婚は行われない。郡司の家の女性が国司の家へ，国司の家の女性が摂関家へ，そして，摂関家の女性が天皇家へ。夫婦の居住が妻方で行われようがどうが，女性はプレゼントとして上へ上へと吸い上げられていく。天皇家の女性は，天皇家より身分の高い家などないはずだから，本来は誰とも結婚できないはずである。しかし，結婚する。人間とは結婚できないが，神となら結婚できる。伊勢や賀茂の神に，斎宮として，あるいは斎院として贈与されるのである。

母方交叉イトコ婚は一種の傾向であって，姨との結婚もその代替婚の役割をにない，中国でのように妻の姪と結婚するのも，息子の嫁を取り上げるというだけのことで，左から右への同じ女性の流れのなかにある。しかし，その流れを逆流させるような，姑との結婚，姉妹の娘との結婚は忌避される。また，父方の交叉イトコ，つまり父の姉妹との結婚が忌避されるのも，やはり女性の贈与の方向を逆転させるからである（図4）。

図3

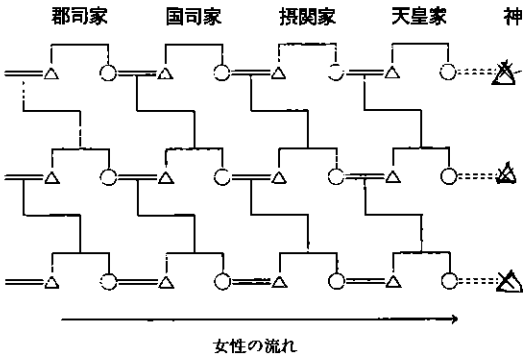
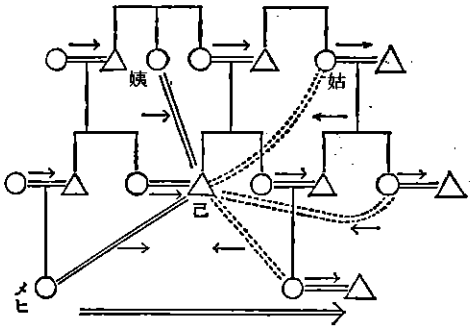


図4



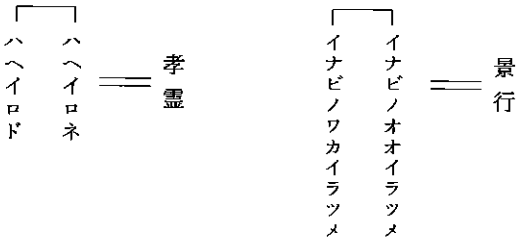
(五)

古代の日本においてソロレート婚が行われたことは改めて言及する必要がないであろう。一家に姉妹がいれば，男は姉と同時に妹とも結婚する。

たとえば，孝霊天皇はワチツミノミコトの娘のハエイロネ，ハエイロドの姉妹と結婚し，景行天皇はハリマノイナビノオオイラツメ，イナビノワカイラツメの姉妹と結婚する（図5）。応神天皇はホムダマワカ王の娘のタカギノイリヒメ，ナカヒメ，ヲトヒメの三姉妹と結婚し，またワニノヒフレノオフミの娘のミヤヌシノヤカハエヒメ，ヲナベノイラツメの姉妹と結婚している。こうした例は枚挙にいとまがない。垂仁天皇とタンバノヒコタタスミチノウシの娘の四姉妹，日本書紀では五姉妹との結婚という例まである。

奈良時代まではこのソロレート婚は行われた。平安時代に入って，この結婚は姿を消す。源氏物語において，心理としてはともかく薫は大君，中君の両方ともを手に入れようとはしな

図5



いであろう。以前は許されていた結婚がタブーとなった，その間の事情をよく伝えているのは，実は伊勢物語の冒頭の章段である。

むかし，おとこ，うゐかうぶりして，平城の京，春日の里にしるよしして，狩に往にけり。その里に，いとなまめいたる女はらから住みけり。このおとこ，かいまみてけり。おもほえずふるさとに，いとはしたなくてありければ，心地まどひにけり。おとこの著たりける狩衣の裾を切りて，歌を書きてやる。そのおとこ，しのぶずりの狩衣をなむ著たりける。

かすが野の若紫のすり衣しのぶのみだれ限り知られず

となむをいつきていひやりける。ついでおもしろきこととも思ひけん。

みちのくの忍ぶもぢずり誰ゆへにみだれそめにし我ならなくに

といふ歌の心ばへなり。昔人は，かくいちはやきみやびをなんしける。

（口語訳―昔，男が従五位に叙爵されて，平城京の春日の里に領地がある関係で，狩に出かけていった。その里に，たいへん美しい姉妹が住んでいた。この男は二人をのぞき見してしまった。思いがけなく，さびれた旧都に，姉妹が不似合いな状態で暮していたので，男はぼうとしてしまった。男は着ていた狩衣の裾を切って，それに歌を書いて送った。その男は，信夫摺りの狩衣を着ていた。

春日野の若い紫草で染めたしのぶずりの衣の乱れ模様のようにあなた方を見たわたしの心の乱れは限りが知れません。

と恋の熟練者ぶって，言いやった。事の次第に面白いこととも思ったのであろうか。

陸奥の信夫郡で産する信夫もぢ摺りの乱れ模様のようにいったい誰のせいで乱れ始めたという私ではないのに

という古歌の心を踏まえたのである。昔の人は，このようにすばやい雅び事をしたのであった。）

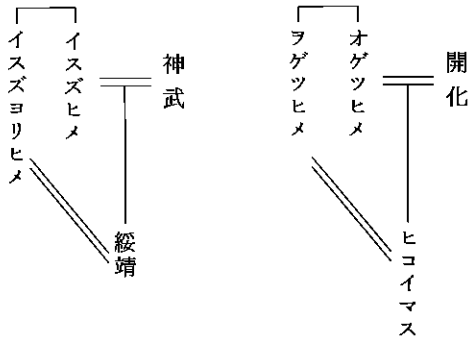
いったい「みやび」とは何なのかを考える上で重要な章段である。「みやび」とは「ひなび」に対し，都風という意味であるが，具体的には「恋」である。美しい女性たちを見れば心をときめかす。そして，その心のときめきを当意即妙の和歌で表現する，それが「みやび」な行為だということになる。ところが，この章段での恋の対象は複数である。願望が対象によって触発されるのでなく，個人の内面のごく奥底から自発的に生じるものであるとすれば，乱暴な観念論だとは思うけれど，相手が一人であろうと，二人であろうと関係ないという議論はできそうである。「人やりならぬ恋」「われから心を乱す」といった感覚こそ古典のものである。プルーストの『恋する乙女たちの影に』では個性化され（individualisé）ないままに，バルベックの堤を歩いていく若々しい乙女たちの一群への恋が綿々と描かれている。伊勢物語の冒頭の章段も，美しい姉妹を「個性化」しない恋である。物語の鑑賞としてはそこで終わる。ただ習俗を問題にするとき，古代では姉妹と同時に結婚できたのが，伊勢物語ではたいへん微妙になっている，ということはいえよう。いつしか禁忌とする抑制が社会に生じている。しかし，その社会の抑制に挑戦するのがこの物語の主人公の真骨頂でもある。

ともあれ，妻の妹，すなわち妻（め）の弟（おと），メノトは，かつては彼女自身が妻でもあったわけである。

(六)

父にとってのメノトは，子にとって姨となる。この女性は誰と結婚すべきなのか。世代的には父なのだが，年令的には息子が近いときもある。始め父に，次に息子に，ということも考えられる。日本書紀によれば，綏靖天皇は姨のイスズヨリヒメと結婚している。また，古事記によれば，ヒコイマス王は姨のヲゲツヒメと結婚している。姨との結婚自体はごくありふれている（図6）。

図6



しかし，姨は交又イトコの代りの配偶者というにとどまらない，ある特別な意味を付加された女性のように思われる。それを示す興味深い神話がある。いわゆる「海幸・山幸」の神話である。ある時，ホヲリノミコトとホデリノミコトとは互いの生活の道具を交換したが，ホヲリノミコトは釣針を借りて失くし，それを返すようにホデリノミコトに強く責められる。釣針を探して海神の宮に到り，そこでトヨタマビメと出会って結婚し，思わず三年を過ごしてしまう。当初の釣針を探す目的を思い出し，ようやくそれを見つけて帰り，ホデリノミコトに返すとともに，ホデリノミコトを呪って復讐する。トヨタマビメは妊娠し，天つ神の子を海原で生むわけにはいかないと考えて，やって来て，海辺に鵜の羽を葦草として産屋を造ることを要求した。その産屋が完成する前に，陣痛が襲って来て，トヨタマビメは夫のホヲリノミコトに出産の姿を見ないように頼んで産屋に入った。

是其の言を奇しと思ほして，其の産まむとするを竊伺みたまへば，八尋和邇に化りて，匍匐ひ委蛇ひき。既ち見驚き畏みて，遁げ退きたまひき。爾に豊玉毘売命，其の伺見たまひし事を知らして，心恥づかしと以為ほして，乃ち其の御子を生み置きて，「妾恒は，海つ道を通して往來はむと欲ひき。然れども吾が形を伺見たまひし，是れ其作づかし」と白したまひて，既ち海坂を塞へて返り入りましき。是を以ちて其の産みましし御子を名づけて，天津日高日子波限建鵜葺草葺不合命と謂ふ。然れども後は，其の伺みたまひし情を恨みたまへども，戀しき心に忍びずて，其の御子を治養しまつる縁に因りて，其の弟，玉依毘売に附けて，歌を献りき。

（口語訳――ホヲリノミコトはトヨタマビメの言葉を不思議に思って，その出産の様子をのぞき見しなさったところ，トヨタマビメは巨大なワニになって，這いずり，のたうっていた。ホヲリノミコトはそれを見て驚き，こわくなって逃げ去ってしまわれた。トヨタマビメは，ホヲリノミコトがのぞき見されたことを知って，恥ずかしいと思い，子供を生み置いたまま，「わたしはいつも，海路を通ってこの国に通おうと思っていた。しかし，あな

たはわたしの本当の姿をごらんになった。それがたいへん恥ずかしい」と申しなさって，そのまま海とこの国の堺をさえぎって，海の国へお帰りになった。そういうわけで，その産みなさった御子をアマツヒコヒコナギサタケウガヤフキアヘズノミコトと謂うのである。

しかしながら，その後，トヨタマビメはホヲリノミコトがのぞき見された気持ちを恨みなさったが，やはり恋しさにたえかねて，妹のタマヨリビメが御子を養育なさっている縁にことよせて，タマヨリビメに托して歌をさし上げなさった。）

ここには古い出産の習俗，および昔話によく見られる「見るなの座敷」のモチーフが見られる。あるいは「天人女房」が上へ飛び立って帰って行くのに対し，海原に水平に帰っていく，異郷の女性，変化のものとの婚姻が語られる。男が蛇であったというのが三輪山説話だとすれば，その逆で，八尋のワニだったというのは，深泥ヶ池の大蛇と契ったという小栗判官の話しの先駆ともなる。

出産を汚れと見て，別に産屋を作り，そこに女性が籠って出産するという習俗が昔はあった。その産屋を鵜の羽根で葺いたというのだが，それは鵜が呑み込んだ魚をすぐに吐き出すように，出産が楽であるようにという願いから来ていると，一応は解釈できる。しかし，古代の人びとの鵜への思い入れにはさらに深いものがあるようである。山口県の日本海側，土井ヶ浜からは昭和30年代以来二百体以上の弥生人の人骨が発見されている。その中の一体の女性の骨の左の胸のあたりにはさらに細い骨片が散らばっていて，鑑定の結果，それは鵜の骨だということがわかった。「鵜を抱く女」と呼ばれるものであるが，鵜を使って呪術や占いを行う巫女であったと思われる。鳥があの世と往き来して魂を運ぶ，死霊が鳥になるという信仰が浸透していた。神の使いとしての鳥を使う巫女の存在は納得できるものであるが，新生児も鳥がもたらすという観念もあったのだと思われる。コウノトリが赤ん坊を連れて来るというのは好奇心に富む子の問いをはぐらかすための苦しまぎれる解答になってしまっているが，やはり世界中にあった古い鳥霊信仰の名残りなのであろう。

さて，ホヲリノミコトとトヨタマビメとは破局を迎えトヨタマビメは海の国へ帰ってしまうのだが，妹のタマヨリビメは残っていた。ホヲリノミコトにとっては妻の弟であり，乳母としてウガヤフキアヘズノミコトを治養（ひたし）していた。ソロレート婚の習俗からすると，タマヨリビメはトヨタマビメとともにホヲリノミコトと結婚したのだと考えられる。妻たち，つまり姉妹たちの誰かが子供の世話をする，それが乳母（めのと）の語源解釈をも含めた，正しい位置づけであろう。そして，この女性は自分が育てたその子の配偶者となる。

「是の天津日高日子波限建鵜葺草葺不合命，其の姨玉依毘売命を娶（めと）して，生みませる御子の名は，五瀬（いつせの）命，次に稲氷（いなひの）命，次に御毛沼（みけぬの）命，次に若御毛沼（わかみけぬ）命…」

文化人類学では母方ヲヂの役割がさまざまに議論される。ヲヒと母方ヲヂとは互いに冗談を言い合う関係であるとか，ヲヒは母方ヲヂの所有物を盗んでもよいとか，ヲヒが病気のときは母方ヲヂが供犠をするとか，あるいは母方ヲヂはヲヒを奴隷して売ってよいとか，社会によってアクセントは違うが，母方ヲヂの重要さが注目されて来た。日本でも，平安時代の摂政，関白というのは実は天皇の母方ヲヂに過ぎないし，狂言では太郎冠者の「山一つあなたのをぢ」が，実際に舞台に登場するというのではないが，頻繁に見え隠れする。その重要性についてはいずれ論じたいが，今はともかく姨，母方のヲバが問題となる。

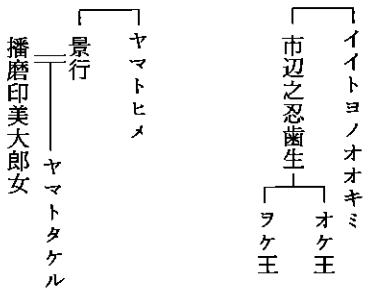
柳田国男の『妹の力』以来，日本の古い民俗において，一家での女性の持つ霊的な力は無視されて来たわけではない。沖縄には「オナリ」の観念があって，王のオナリである聞得大君が琉球王朝の政治の中枢にはいて，大きな役割を果たした。しかし，それは姉妹であって，下の世代の者にとっては父方のヲバ，姑であった。実は古事記に，極めて象徴的な誤字を犯している箇所が二つある。

故，命を受けて罷り行でましし時，伊勢の大御神宮に参入りて，神の朝廷を拝みて，既ち其の姨倭比売命に白したまひけらくは，「天皇既に吾死ねと思ほす所以か……（口語訳――そうして，倭建命が父景行天皇の命令を受けて東国に旅立たれる時，伊勢神宮にお参りになって，神のいらっしゃる所を拝み，そして姨の倭比売命に申されたことには，「天皇はわたしが死んだらいいと思っていらっしゃるせいか…）

爾に即ち小楯連聞き驚きて，床より堕ち転びて，其の室の人等を追ひ出して，其の二柱の王子を左右の膝の上に坐せて，泣き悲しみて，人民を集へて仮宮を作り，其の仮宮に坐せまつり置きて，駅便を貢上りき。是に其の姨飯豊王，聞き歓ばして，宮に上らしめたまひき。（口語訳――そこで小楯連は王子の歌を聞いて驚き，床から転げ落ちて，その室にいる人たちを追い出して，その二柱の皇子を左右の膝の上に座らせ，泣き悲しんで，そして人民を集めて仮の宮殿を造らせ，その仮の宮殿に二皇子を住まわせ，早馬の使者を大和へ上らせた。すると，二人の皇子の姨の飯豊王はこの知らせを聞いて，お喜びになって，二皇子を葛城の角刺宮に上らせなさった。）

ここに二人の「姨」が現れる。ヤマトヒメとイイトヨノオオキミ，一人は伊勢の斎宮，一人は清寧天皇亡き後の大和朝廷の空位期に実質的に政を行ったらしい皇女で，いずれも堂々たる女性，霊力の豊かな女性であった。ヤマトヒメは悲劇の英雄であるヤマトタケルの最大の庇護者として，心の依り処であり，草那芸剣は彼女の手から与えられたものであり，また一方，イイトヨノオオキミは，強暴な雄略の手から逃がれて播摩の国で馬飼，牛飼となっていたオケ・ヲケの二王子を皇位につける，やはり心強い後楯となる女性である。それを古事記では「姨」と表記するのであるが，これはどう考えても間違いであって，父方のヲバ，「姑」でなくてはならない。これは「姨」という文字の強烈な色合いに引き寄せられた誤字なのだと思われる（図7）。

図7



(七)

折口信夫の『水の女』という不思議な論考がある。「みつは」「みぬま」と呼ばれる，禊ぎの際に現れ，世話をする女性がいた。丹波道主貴の家の女たちは一群として宮廷に入ったが，この女性たちは帝の「みづのをひも」を解くためにやって来たのであった。帝が禊ぎ，あるいは湯浴みをするとき，湯や水の中で解きさける物忌みの布があって，それを解き，また結んで，霊結びに奉仕することになっていたというのである。湯は斎（ゆ）であり，斎川水（ゆかはみづ）の形が縮って「ゆ」一音で，禊ぎに用いる温水をいうようになったともいう。また『大嘗祭の本義』では，大嘗祭の物忌みが明けて，天皇は天の羽衣を湯殿で脱ぐ，その用を務める女性たちがいたことを折口は指摘する。これは成人したみかどへの奉仕であるが，皇子たちへの奉仕もある。新生児が生まれての産湯も実は最初の禊ぎ，第一回目の「ゆかはあみ」と考えられる。

「一体昔は，今の世の乳母の役をする者が，四人あった。大湯坐・若湯坐・飯嚼・乳母である。此大湯坐は，主として，産児に産湯をつかはせる者，つまり湯の中へ，御子をお据ゑ申す役目なのである。若湯坐も同様である。乳母は，乳をのませる者，飯がみは，飯や食物を嚼んで，口うつしに呉れる者である。」（「大嘗祭の本義」『折口信夫全集第三巻』所収）

子供のとき湯浴みをさせてくれる女性がいて，大人になってもいっしょに風呂に入る女性

図8

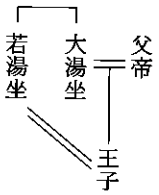


図9

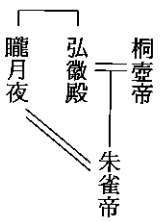


図10

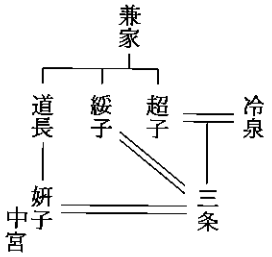
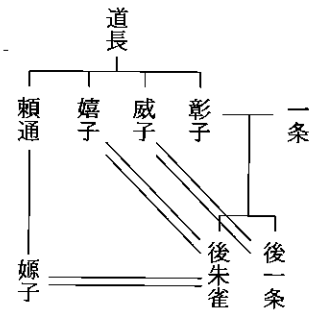


図11



がいる，それがこの国の男女関係の基本にあるという，何ともうがつた見方を折口はしていると思うのだが，重要なのは，それが皇室においてもそうだということである。

「大湯坐は，年をとった女で，若湯坐は，年の若い者がつとめる。それから事実に徴して見ると，大湯坐は，天子様の后となるし，若湯坐は，皇子の后となる傾きが見えて居る。」（同）

多分，折口のこの結論は学界の誰も承認していないであろう。姨の意義について，そして姨との結婚について，今まで積極的には考えられて来なかった。折口のいっていることは承認どころか，理解すらされていないに違いない。折口は若湯坐，つまり姨との結婚をいっているのである（図8）。

(八)

源氏物語で光源氏の須磨・明石への退去の直接の原因となったのは，朱雀帝の妻である朧月夜と通じたことが露顕したことにあった。朧月夜は女御・更衣としてでなく，尚侍として参内していた。それゆえ，内侍のかんの君と呼ばれる。朱雀帝にとっては母の妹，つまり姨に当たる（図9）。

フィクションの世界ではなく，現実の世界に戻って見ることにしよう。『栄華物語』である。

東宮は今年十一にならせ給にければ，この十月に御元服の事あるべきに，おほとの丶御むすめ，対の御方といふ人の腹におはするをぞ，内侍のかみになし奉り給て，やがて御副臥にとおぼし掟てさせ給て，その御調度ども，夜を昼に急がせ給。（口語訳――東宮（三条院）は今年十一におなりになったので，この十月に御元服の儀式があることになっていたが，兼家殿の御娘で，対の御方に産ませになったのを，尚侍という身分にして，そのままお伽役とお決めになって，その入内の家具・調度を夜を昼にしてお急ぎになる。）

三条院はやはり兼家の娘の超子の子であり，綏子は姨に当たる。内侍司の長官に，妻の弟が，姨が当たる。そして，それがそのまま妻となる。この背景には，元服した男子の最初の女性は姨であったという民俗が見え隠れしている。そして，やはり同世代の交又イトコが本命で，後に姨は棄てられる運命にあることも見てとれよう（図10）。

同じく，道長の娘の威子も後一条と結婚する。やはり尚侍として入内する。姨十九才，甥十一才であった。「みかどの御有様よりは，督（かん）のとの丶こよなく大人びさせ給へり」とある。道長の晩年，最後に末娘の嬉子を尚侍として後朱雀院に入内させている。「督の殿御年十五ばかりにおはします。東宮は十三にぞおはしましけるに，いみじうめやすき程の御仲らひにおはします」とある（図11）。

姨を尚侍として入内させる，これは平安時代に藤原家が自己の権力の伸張のための術策のようにも思われるが，内侍司というものの当初からの性格がそれが行われやすくしているのだと思われる。つまり，天皇に近侍する女房たち，メノトたちの一群が務めるところであって，文

字通り，妻の弟であり，子にとっては姨がそこに入るのはいとも自然であろう。

しかし，姨はいずれ棄てられる。彼女は元服した男子にとって最初の女性であるが，異世代である。やがて同世代の若い女性が男の前に現れて，「床離れ」することになるであろう。『大鏡』を読んでいて，いちばん気の毒で，同情を禁じえないのは，上に上げた尚侍綏子の運命である。彼女は源頼定と密通をし，子を産む。里帰りをしていた彼女のところに，兄の道長がやって来て，事の真偽を確めようと，胸許をひきあけ，乳房を乱暴にひねると，乳がさっとはしりかかった。「内侍のかみは，殿かへらせ給てのちに，人やりならぬ御心づから，いみじうなきたまひけり」とある。姨の一つの運命であったと思われる。

(九)

「姨棄て」の伝説について，もちろんここではマルサシアンの見地を取らない。ロベらしの意味を持った棄老伝説とは考えない。資料としては大和物語の一章だけなのであるが，この物語は実にアレゴリカルに出来ているように思われる。

信濃の国の更級といふところに，男が住んでいた。若い時に親が死んだので，をばが親代りになって，若くからいっしょに暮していた。この男が迎えた妻の気持ちには邪険なところがあって，この姑（しうとめ）の，年老い，腰が曲がっているのを嫌って，男にもこのをばの意地が悪いことを告げ口した。男も昔のようでなく，疎そかに扱うことが，このをばのために多くなっていった。この姨はたいへん年老い，腰も二重になっていた。それをまたこの嫁は厄介がって，よく今までもっていることだと思って，悪態をつきながら，「つれて行って，山深く棄ててください」と強く責めたので，男も閉口して，そうしようと思うようになった。月の明い夜，男が「おばあさん，さあいらっしゃい。寺で法事がありますので，それをお見せしましょう」といったので，をばはたいへん喜んで男に背負われた。男は高い山のふもとに住んでいたので，その山の奥深く入って行って，高い山の峯の，をばが決して降りて来ることのできない所に置いて，逃げた。……

若い時に親が死んだ。この親は母だと思われる。「をば」は母の姉妹，それが母代りに育てた。「若くよりあひそひてあるに」という表現は微妙であるが，必ずしも深読みする必要はない。妻としてはともかく，乳母としての姨の役割りは果たした。そこに若い妻が入り込んで来て，役割りを失くす。男にとっても姨は必要でなくなり，妻の言葉に従って姨を山に棄てに行く……「姨棄て」の伝説は，姨が民俗で果した大きな役割りを背景に読むべきである。もし，それがわかりにくくなっているとすれば，それこそ慈しみあふれた姨を棄て去った社会にわれわれが生きているからにほかなるまい。

（1990年12月31日脱稿）

〔『讃岐典侍日記』の本文は日本古典文学全集（小学館），『古事記』『伊勢物語』の本文は日本古典文学大系（岩波書店）を用い，若干手を加えた。〕